

「文明構造論」閉巻にあたって

2005年に始まった「文明構造論」の刊行は、発行責任者の停年退職にともない、本巻第10号をもってひとまずその任を終える運びとなった。早いものでもう一昔になる。研究室の学生諸君が中心になって、互いに切磋琢磨しあい、批評し議論しあうなかで、自分たちの独自の研究を外に向けて発信してゆくというのが本雑誌の当初のもくろみであった。このもくろみのいくぶんかは、とりあえずこの十年でもって達せられたかと思う。うれしくもあり、ほっとしてもいる。

この先まっとうに続けられるのだろうかという不安をかかえて始まった作成作業も、原稿も毎年それなりに出そろい、数度にわたる査読会——研究室での酒を飲みながらの突つきあいやけなしあい——も、だんだん板についてきて、そのうちなんとなく心待ちされる日常風景となってしまった。ふりかえれば、とてもなつかしい思い出である。卒業して抜けていった者あり、就職してなお投稿をつづけてくれた者あり、原稿をいちども書けないままに終わってしまった者あり、毎年執念で書きつづけた者あり、薄汚いごつい男子学生にまじって可愛らしい女子学生あり、老いもあり、また若きもあった。みんな、それぞれがそれぞれなりのテーマを抱えていた。一人ひとりの顔は今でもはっきりと思い出すことができる。妄想願望になるが、じつは、この自由な査読会をきっかけにして、研究室を、梁山泊のごとく猛者連が集結する場、硬直したアカデミズムを笑い飛ばして、もっとアクチュアルな、答えのない問いをずばり投げかけあうような喧々囂々たる場にしかつたところもあったが、これは、大学という研究機関の性格上さまざまな制約もあり、またこちらの能力不足、精力不足もたたって、見果てぬ夢に終わらざるをえなかった。今になって思えば、いくぶん悔いの残るところではある。

雑誌刊行にあたってはいろいろな方々にお世話になった。とくに同僚の江田憲治先生には、当初より積極的なご協力をいただき、ご自身の研究室の学生さんの参加も促していただいた。この場を借りて、あつく御礼申し上げる次第である。

2014年10月

京都大学大学院人間・環境学研究所

現代文明論講座文明構造論分野 道簀泰三